

17 世紀以前のウェールズにおけるハープと音楽  
寺本圭佑

**Harps and music in Wales before the seventeenth-century**  
**Keisuke Teramoto**

**Abstract:** Before the triple harp was introduced to Wales in the late seventeenth-century, Welsh bards played a distinctive harp through the centuries. A true Welsh harp, it had a single low, horsehair-string, and the harp was leathered and bray pinned. In

Wales, the sound of the bray harp was praised and highly regarded by bards. The music for the bray harp in Wales is still preserved in Robert ap Huw's manuscript (c.1613). Traditional music is compiled in this manuscript by Robert ap Huw (c.1580-1665) who was one of the last Welsh bards. This article describes some elements of the distinct Welsh music from two points of view: the instrument and the musical score.

### 17世紀以降のウェルシュ・ハーブ

ウェールズ法には、よき人々Gwrdaにとって必要不可欠なものは「ハーブ、格子縞の肩掛け、そして大釜」、別のヴァージョンでは「チェス・マント・ハーブ」の3つであると記されている。このように、ウェールズではハーブという楽器が古くから重んじられており、現在でも18世紀から継承されているハーブ音楽の伝統が残されている。現在一般的にウェルシュ・ハーブと呼ばれている楽器は、別名バロックハーブあるいはトリプルハーブとも呼ばれ、通常のハーブとは異なり、3列の弦を持っていることが特徴である。外側の弦はピアノの白鍵、内側は黒鍵に相当する音に調弦されているため、半音階を自由に演奏することができる。バロックハーブという異名が示すように、この楽器はバロック時代(1600-1750年頃)に広くヨーロッパで演奏されていた。ところが1720年代にバイエルンのヤコブ・ホッホブリュッカーによってペダルハーブが発明され、ペダルによって半音階を出すことが可能になってから、ヨーロッパではバロックハーブは次第に演奏されなくなった。ペダルハーブはウェールズにももたらされ、19世紀にはハーブのリストと呼ばれたエライアス・パリッシュ＝アルヴァース(1808-1849)や、ヴィクトリア女王のハーブ奏者だったジョン・トーマス(1826-1913)といった優れた演奏家を輩出した。新しい楽器がもたらされた後も、ウェールズではトリプルハーブは演奏され続けており、ナンシ・リチャーズ・ジョーンズ(1888-1979)をはじめとする優れた演奏家が活躍していた。しかし17世紀以前のウェールズでは、何百年もの間これらとはまったく異なるハーブが演奏されていた。

### ウェールズ固有のハーブ

アイルランドには14世紀に作られたトリニティ・カレッジ・ハーブが、スコットランドには15世紀から16世紀初めのクイーン・メアリー・ハーブ、ラumont・ハーブが現存している。これらの楽器は構造的にがっしりとした造りで、金属製の弦が張られていた。一方イング

も動物の皮が張られていたといわれる。5世紀ころにエジプトなどから、キリスト教の隠修士らがウェールズやアイルランドにやってきていたが、これらのキリスト教徒が中近東の皮の張られたハープを直接ウェールズにもたらしたのかもしれない。

### ブレイハープ

17世紀以前のウェールズではブレイハープ (bray harp) と呼ばれる楽器が演奏されていた。ブレイとは「ロバの鳴き声」や「騒々しい不快な音」を意味する英語である。ブレイピンと呼ばれるL字型のピンが弦と弦の間に取り付けられていて、弦をはじくとこのピンに触れて共振し「ぶんぶん」というノイズを発生させるのである。ブレイハープはウェールズだけではなく、中世・ルネサンスを通してヨーロッパで広く演奏されていた楽器であり、別名ゴシック・ハープとも呼ばれる。

筆者はヒエロニムス・ボスの《快樂の園》に描かれたブレイハープを復元した。この楽器は共鳴胴が薄く、軽量で持ち運びが楽であるという利点があるが、その反面ブレイをつけない状態で弦を弾くときわめて小さな音しか出ない。ブレイを取り付けることによって、倍音を多く含んだノイズが発生し音量が増幅するのである。この構造は、日本の琵琶や三味線にみられる「サワリ」と呼ばれる構造と類似しており、アメリカの作曲家ジョン・ケージ (1912-1992) が考案したプリペアド・ピアノも同じ発想である。

ドイツのハープ作家エリック・クラインマン氏は14-16世紀のヨーロッパのハープのほとんどはブレイハープだったことを教えてくれた。つまり、教会のステンドグラスに描かれた天使のハープは、われわれのイメージとはかけ離れた実に耳障りな音を立てていたのである。ブレイの音色はアイルランドの金属弦ハープの甘美な音色ともまったく異なっており、実際に聴き比べてみるとグリフィズ・アプ・カナン<sup>1</sup>の伝説にも納得がいく。

ウェールズでも16世紀前半のステンドグラスにブレイハープを演奏する天使が描かれている。また、カーディフの民俗博物館に保存されている小さな銀のハープのブローチにもブレイが取り付けられている。このブローチは、1568年にカーウィスで行われたアイステズボドで、最も優れたハープ奏者に与えられたものである。16世紀半ばに書かれたウェルシュ・ハープを描写した詩にもやはりブレイハープへの言及がある。

For, my Harp is made of a good mare's skin;  
The strings be of horsehair, it maketh a good din.  
My song, and my voice, and my Harp doth agree,  
Much like the buzzing of a humble bee:

17世紀末になっても、ウェルシュ・ハープという呼称はトリプルハープではなく、ブレイハープのことを指していた。当時ケンブリッジのヘブライ語教授であったジェームズ・トールボットが、ウェールズのハープに関する貴重な資料を残している。彼は3種類のウェルシュ・ハープについて言及しているが、いずれもトリプルハープではない。彼は *Welch or Bray harp* が「ウェールズ固有のハープ」であると記し、「この楽器の共鳴胴は全体が一本のモチノキをくりぬいて作られており、背面は平らな樫の木でできている。支柱とネックは楓の木でできている。通常は34本の弦が張られているが、31本の楽器もある。弦は丸いボタンで留める代わりに、ブレイによって共鳴胴に固定されており、それが耳障りな音を立てる」と描写している。

この描写で注意すべき点は、ブレイが弦を共鳴胴に固定するために使用されていたということである。ウェルシュ・ハープのブレイは着脱不可能なものだった。つまり、ブレイとは元来音量を増加させる目的で弦と弦の間に取り付けられたものではなく、楽器の構造上必要不可欠な部品であった。トリプルハープがもたらされた後も、しばらくの間ブレイハープは演奏され続けていた。歴史家トマス・プライス (1787-1848) も、ダヴィッド・ワトキンという老人からブレイハープを学んだことがあるという。しかし、この時代のブレイは着脱可能なものになっており、ダンス音楽を演奏するときのみブレイが用いられたという。18世紀末までに、ブレイは音楽的にも楽器の構造上も本質的な要素ではなく、付随的な要素に変化していたのである。

#### ロバート・アブ・ヒュー手稿譜

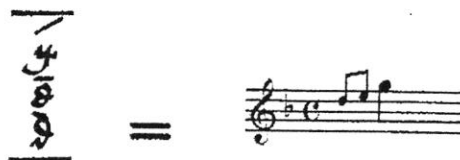
幸運なことに、17世紀以前のウェールズにおけるハープ音楽の楽譜が現存している。それは、1613年頃にアングルシー島のハープ奏者・詩人であるロバート・アブ・ヒュー(c.1580-1665)によって編纂された。アブ・ヒューに贈られた詩の中に、彼がブレイハープを演奏していたことが書かれているため、これまでに考察してきた17世紀以前の

ハープで演奏される音楽であることは間違いない。この手稿譜には何世紀もの間、口頭伝承によって伝えられてきたウェールズのバード音楽が、バード自身の手によって記されている。手稿譜は1665年のアブ・ヒューの死後、4男のヘンリー・ヒューズに遺贈された後、アングルシーのメイリック家に保存されていた。1720年代に、土地測量士としてメイリック家を訪れた古物研究家のルイス・モリス Lewis Morris (1701-65) によってアブ・ヒュー手稿譜が再発見され、日の目を見ることになった。ルイス・モリスは手稿譜に序文をつけて製本し、手稿譜の中に書き込みを行った。彼は、当時最も高名な音楽学者であったチャールズ・バーニーらに手稿譜を見せて調査を依頼したが、この時点で手稿譜の音楽を理解できる人物はひとりもいなかった。それ以降数多くの音楽学者や演奏家によってアブ・ヒュー手稿譜は研究され続けて現代に至っている。

手稿譜の23ページから34ページまでは、16世紀のハープ奏者ウィリアム・ペンシンの本から書写されたもので、他の部分よりも古い時代に書かれたものである。同手稿譜には楽譜だけではなく、装飾法の指示、調弦法なども記されている。装飾法に関しては、18世紀末に記録されたアイルランドのハープ奏者の技法と奇妙なほど一致している。これは両国のハープ音楽における密接な関連性を示す証拠となっている。手稿譜には現在一般的に用いられている五線記譜法ではなく、タブラチュアというアルファベットを用いた特殊な記譜法が用いられている。使用されているアルファベットは慣習的なAからGまで（ラからソ）であり、文字を重ねたり、文字の横や上に点や線をつけたりすることオクターヴの違いを示している。

楽譜は水平な線によって上下に分割されており、上に高音域、下に低音域の音がかかれている。ウェールズでは、アイルランドと同様に高音域は左手、低音域は右手で演奏された。これは他のヨーロッパ地域における慣習的な演奏姿勢とは逆である。高音域の音の塊（コラム）の上に特殊な指示記号が記された場合は、タイミングをずらして演奏する。たとえば、右上がりの斜線が引かれている場合、それらの音は、下から上に演奏することを示しているのである（図1）。

(図 1)



### 24 のメジャー

ウェールズのバード音楽における特徴のひとつにメジャーMesur と呼ばれる一種の音楽理論が存在する。これは 1 と 0 を並べた組み合わせであり、作曲の基礎として役立てるために作られた。14 世紀から理想的な 24 のメジャーが定められ、成文化されるようになった。アーサー王の 24 の騎士や、ウェールズ法における 24 の役人、また 24 の娯楽など、24 という数字はウェールズ人にとって特別な意味を持っていたようである。音楽のメジャーの 1 と 0 はそれぞれ低音域のコードの種類を決定するために用いられたと考えられている。1 は cyweirdant (主要な弦) と呼ばれ、0 は tyniad (引っ張ること) と呼ばれた。

たとえば《Gosteg Dafydd Athro》という楽曲は、korffiniwr 11001011 というメジャーによって書かれている。冒頭の部分を現代譜にすると次のようになり、低音域は 2 種類のコードの交替によって作曲されていることがわかる (譜例 1)。

(譜例 1)



実際にはアプ・ヒュー手稿譜に記されている楽曲の中には 2 種類以上のコードが用いられているものも多く、必ずしもすべての楽曲がメジャーによって書かれているわけではない。一例として、《Kaniad Llewelyn Delynior》を挙げる (譜例 2)。

(譜例 2)



《Kaniad Llewelyn Delyniior》の低音は2種類以上のコードが用いられており、どれが1でどれが0なのか判別することができない。だがおそらくこのような楽曲も元来は《Gosteg Dafydd Athro》と同様に厳格なメジャーに基づき、2種類のコードのみで作られていたと思われる。口伝えによって音楽が伝承されていく過程のなかで、バードたちが元来の音楽に手を加えてアレンジした結果、コードの種類を増やしていったのであろう。このことから、17世紀前半のバードはそれほどメジャーにとらわれずに自由に演奏を行っていたことがわかる。《Kaniad Llewelyn Delyniior》に比べると《Gosteg Dafydd Athro》の方がより古い音楽の面影を残しているとも考えられるだろう。

近年の研究によってウェールズには、楽器だけではなく音楽の構造に関しても、他国とはまったく異なる独自のものが存在していたことが少しずつわかってきた。この国ではトリプルハープやペダルハープといった新しい楽器がもたらされても、古い皮のハープやブレイハープが淘汰されることなく、しばらくの間共存していたのである。ウェールズでは、独自の音楽や音楽に付随する事柄を、文書によって保護しなくてはいけないという意識の目覚めが早い時期に起きていた。それは16世紀のソールズベリによる、ウェールズ語の保存運動の影響が大きかった。その後18世紀にも、ルイス・モリスやエドワード・ジョーンズらによる考古研究が盛んに行われていた。彼らの活動が、ウェールズに一種時代錯誤的な楽器と音楽レパートリーが長く保存されていた要因となったものと思われる。